

はじめての事

市川茂子

去年の年末年始はコロナ禍が広がっていたが、例年の通りに身内や近所の方も来て、にぎやかな新年の出発ができた。

年齢を一つ重ねるごとに寒さがことさら身にしみるようになったのも、九十歳になってはじめての経験である。老衰とともに、見えないところで未だにコロナの感染が続いていることもある。もしも感染したら回りの方々にも迷惑をかけてしまうからと思い、かつてない一大決心をして、新年は一人正月をすることにした。

年末が近づくと、息子や甥など身内の者が心配して、食べ物を送ってきたり、必要なものや手伝う仕事がないかと言ってくるので、早目にこちらから申し渡しとして、一人正月をすることにすると伝えた。これもコロナ禍の最中であるからと自分に言い聞かせながら……。

一人分といっても、一通りの年末年始の準備はしなければならぬ。これまでは息子や甥が自分たちの仕事を片付けて、年末から来て自分たちの食べ物はもちろんのこと、こちらの必要なものを指示すると、スーパーや商店街に行つて用意してくれた。

それを煮たり焼いたりして正月用の料理にして出すのが、こちらの役目だった。仕事始めの前日ぐらいまで泊まっているの、足りなくなったらすぐに出かけて買ってくる。昔ながらのわが家の味として煮炊きしたものを懐かしく食べてくれる。大晦日から酒盛りがはじまるのだった。

去年までは、楽しみながらの正月を忙しく過ごしてきたのに、九十歳の声を聞いた途端に動くのが面倒になってきた。ご近所で可愛がっていたお嬢さんが結婚して、ご主人と二人で正月の挨拶に来るといふ電話があったが、今年は皆さんを断つて一人正月にしたからと、丁重にお断りした。

一人正月の年末年始の用意をしながら、静かな元旦を迎えた。何となく落ちつかないような気もしたが、日常の一人暮らしの延長だと思っていると、二日目にはいつもお世話になっている方が、年賀の挨拶とごきげん伺いに来て下さったので^{ほんま}物とした。なにしろはじめての事である。

それにもう一つのはじめての事があった。昨年十月になって、この年齢になったので何かあれば^{ただごと}唯事では済まないだろうと思ひ、近所の診療所ではじめて区健康診断を受けた。後日の検査結果で心臓肥大など、いくつかの悪いところが見つかった。診療所では精密検査ができないので、いつも行っている病院に紹介状を書いてくれた。

一人正月の静かな年明けの一月五日から、病院の予約で行動がはじまった。